

主 題：キリストは必ず再臨される 4
聖書箇所：ペテロの手紙第二 3章14節

今日は、ペテロの手紙第二3章14節のところを見ていきます。いよいよこの手紙の最後の箇所に掛かります。ペテロが愛する兄弟たちに送ったこの手紙の最後に記したことは「終末に関すること」でした。主イエス・キリストの来臨について彼はここで改めて記すのです。教会の中に入り込んで来た、また、確実に入り込んで来るにせ教師たち、また、キリストの来臨の真理をあざける者たちへの警告を、ペテロは兄弟たちに送るのです。それは、そのような誤った教えによってこの愛する兄弟たちが惑われないためにです。また同時に、彼らが信仰者としての勇気や確信を失わないためにです。

ですから、この最後は「ペテロの警告と激励のメッセージ」ということができます。私たちはこの手紙の3：1で「愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、これらの手紙により、記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるためなのです。」ということを見ました。兄弟たちの信仰を今一度奮い立たせるためにこの手紙を記したということをお教えています。確かに、にせ教師たちが入って来ることに對する警告や、また、今一度信仰者たちの信仰が鼓舞されるようにという激励のメッセージです。同時に、この手紙は「銘記すべきメッセージ」でもあると言えます。

心にしっかりと刻んで、決して忘れてはならない重要な真理を記したメッセージです。もちろん、聖書はすべてがそうですが、特に、ペテロが伝えたかったこと、特に、ペテロが自分の愛する兄弟たちに伝えたかったこと、彼らの心にしっかりと刻んでおきたかったこと、それらがここに記されています。

*** 「銘記すべきメッセージ」と言ったのは？**

(1) 「キリストの再臨・来臨」が紛れもない事実であるから

イエス・キリストの再臨が確実に起こるといふこと、しかも、その日が近いといふ紛れもない事実、だから、しっかりと心に刻んでおかなければいけない「銘記すべきメッセージ」なのです。この後見ていきますが、イエス・キリストが帰って来るといふ真理、これは多くのクリスチャンたちにとって大きな励みでした。時代を越えて、場所を越えて、クリスチャンたちはこの神の約束に立って生きて来ました。今、神の約束と言ったのは、イエス・キリストがこれから十字架に架かると弟子たちに話したとき、弟子たちは動揺を覚えました。「どうなってしまうのだろう…?」、頼りにして来たイエスがいなくなったら「どうなるのだろう?」と。

そのときにイエスが言われたのは、皆さんもよくご存じのヨハネ14章のみことばです。14：2、3「2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」、想像してみてください。弟子たちがこのことばを聞いたときにどのように思ったのか?確かに、一時的にイエスと離ればなれになってしまうのもそれは永遠に続くことではなく、私たちはこの主と永遠にともに過ごすこととなります。主は私のために天に住まいを設けてくださり、そこに私を迎えるために、この地に戻って来られるのです。クリスチャンたちはこの約束に立ったのです。

この当時にこのメッセージを聞いた弟子たちだけでなく、記されたこのメッセージを読んだ人たちは、どの時代であろうと、どの場所にあっても、彼らはこの真理に立って、この真理がもたらす希望をもって生きたのです。様々な迫害の中にあつて、たとえこの地上でのいのちを今落とすことになつても、私はこれで終わらない、この後、私にはすばらしい住まいが、しかも、永遠の住まいが備えられていると。クリスチャンは感謝です。死んでも生きるという希望をもっているのです。どこに行くかが分かっています。だれと永遠を過ごすのかが分かっています。

主イエス・キリストがオリブ山から天に凱旋していかれるとき、弟子たちはどのような思いでその光景を見ていたでしょう?そこで何が起こったのか思い出してください。白い衣を着た人がふたり、彼らの傍に立っていました。使徒の働き1：11「そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」、多くの弟子たちはすでにイエスのことばから、「場所を備えたらまた帰って来る」といふメッセージを聞いていました。そして、このとき彼らは改めてそのメッセージを聞かされるのです。神のご配慮、神は私たちの弱さ愚かさをご存じだということをご存知です。イエスのおことばを聞いたのだから、しっかりとそれに確信を置いて生きなさいと言います。私たちはそのように聞いてもすぐに忘れてしまいます。この箇所を見ても、天使たちは彼らにそのことを

教えています。「イエスは帰って来る」と。

ですから、聖書は私たちに、イエス・キリストは必ず再臨されること、あざける者たちがやって来て「再臨など起こらない」と言ったとしても、私たちはみことばを通して必ずそれは起こるとその確信を持っています。これは紛れもない事実であり、私たちはそれがもういつ起こってもおかしくないと、その確信をもっています。みことばがそのように教えているからです。

(2) キリスト者の生き方を変えるものだから

また、私たちがこのキリストの再臨に関してしっかり心に刻んでおかなければいけないことは、それが聖書が教えていることだということだけでなく、この事実が私たちひとり一人の生き方を変えるものということです。イエス・キリストの再臨という事実は、それを信じる私たちの生き方を変えるということです。ペテロはこのメッセージを記しましたが、彼は確実にイエス・キリストにあつて成長しました。彼は漁師でした。有名な学校に行ったわけではありません。その当時の最高の学問を受けたわけでもない。確かに、漁師としての腕はすばらしいものだったでしょう。しかし、人間的には普通の漁師でした。しかし、神はその人物を選ばれて、彼が神に従うことによって、こんなに彼を成長させて神の役に立つ者としてお用いになりました。

パウロもそうでした。彼も確かに神によって成長しました。彼は最高の学問を受けていました。ペテロとパウロ、育った環境は違いましたが、神はパウロを選び彼を砕き、そして、彼を用いられたのです。この二人に共通していることは何か？それは、二人ともイエス・キリストの再臨を待望して生きたということです。彼らはイエス・キリストが間もなく帰って来られると、そのことを信じて生きた者たちです。そして、彼らがそのことを信じていたゆえに、その彼らの信仰が彼らと接する人たちや教会に影響を及ぼしました。

・小アジアの各教会に : ペテロは小アジアの様々な教会にこの手紙を送っています。すでに見ましたが、I ペテロ 1 : 3には「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちに新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」と記されていました。皆さん、救いに与るということは、罪の赦しをいただいて天国への切符をいただいて、それで終わりではありません。神によって生まれ変わった者たち、神によって救われた私たち信仰者は、生ける希望をもって生きる者へと変えられたということです。死んでも生きるという希望をもっているのです。この肉体が減んでも、私たちは栄光のからだを与えられ、そして、主イエス・キリストとともに永遠を過ごすという希望です。

私たちは確かに、この地上に生きています。しかし、私たちが見ているのはこの地上ではなくその先です。私たちは永遠を見て生きています。そのようにしてパウロもまたペテロも生きたのです。なぜなら、信仰者は「生ける望みを持つ者」として生まれ変わったからです。

こういうことです。私たちは世の人が持っていないものを持っています。与えられたのです。世の人は一所懸命希望を持つようとしているかもしれませんが、物事をポジティブに考えることによって、考え方の志向を変えることによって、いろいろな難局に勝利できるとしてそのように生きるかもしれませんが、でも、私たちクリスチャンはそうではありません。私たちは神の約束に立っているのです。私たちが死んでも神とともに生きるというその希望は、あのイエス・キリストの復活によるものです。死からよみがえって来られた主が私たちの主であり、そして、彼がよみがえられたように私たちもよみがえるのです。そして、私たちはその神と永遠を過ごすという希望をいただきました。

私たちが考えなければいけないことは、私たちは生ける望みをいただいた者としてそれにふさわしく生きていくかどうかです。このことを考えてみてください。私たちクリスチャンは私たちの周りの人たちに影響を及ぼしながら生きる者だということです。先に言ったように、ペテロにしてもパウロにしても、もちろん、それ以外の多くの信仰者たち、生ける望みをもっていた者たちは、周りに影響を及ぼしました。

・テサロニケの教会において : パウロがテサロニケに伝道に行ったときに、テサロニケの多くの人たちが信仰に与りました。そして、彼らに関してパウロはこのように記しています。I テサロニケ 1 : 9、10「:9 私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、:10 また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。」と。彼らが偶像から真の神に立ち返ったこと、彼らが生ける神に仕えるようになったこと、しかも、彼らがイエスが帰って来られることを待ち望んでいたこと、これは彼らは自分たちだけで話していたのではありません。もちろん、それもあつたでしょう。しかし、パウロが言っています。「それらのことは他の人々が言い広めているのです。」と。つまり、彼らの生き方はそれ以外の人たちの生き方とは違ったのです。

そこで、このクリスチャンたちの生き方を見ていた人たちは、彼らの生き方を通してこの真理を知るのです。彼らが偶像から生ける神に立ち返っていたこと、彼らはこの生ける神に仕えていた、しかも、この生ける神が帰って来られる、そのときを待ち望んでいた。ということは、明らかに彼らは周りの人たちに影響を及ぼしていたのです。クリスチャンでない人たちがこのクリスチャンたちを見て「この人たちは違う」ということに気付いていたのです。私たちは自分に問い掛けなければいけません。私の歩みはそのような歩みかどうかということ。あなたの周りの人たちがあなたを見て、「この人は何か違う、この人は私の持っているものを持っているようだ」と、そのように人々が思うかどうかです。

前にも皆さんに話したと思いますが、私が初めて教会に足を踏み入れたそのきっかけとなったのは、ある一人の人のあいさつです。その人が「こんばんは」と言われたその一言を聞いたときに、私はここに入らなければいけないと思いました。なぜなら、この人が持っているものを私は持っていないと確信したからです。説明はうまくできませんが、少なくとも、その姉妹が言われたその一言、だれかも知らないしこれまで会ったこともない方ですが、その方の「こんばんは」は私にないものをこの方は持っている、いったい、この教会には何があるのだろうか？「行ってみよう」と思ったのです。それまでは教会に入ることを躊躇していました。入るところをクラスメイトのだれかが見ていたら恰好悪いと思いました。だから、だれも見えていないときと思いましたが、なかなか勇気がなくてうろろうろしていたのです。でも、その声を聞いたときに、もう人がどう見ていようとどう思われようと関係なくなって「ここには何があるのだろうか」と思ったのです。もちろん、その方はそんなことを考えながら挨拶をしたわけでないことは明らかです。

でも、この当時にこのクリスチャンたちと同じように、今も私たちのこの時代においても、その人たちの生きざまを見て「この人たちは違う、この人たちの持っている何か、それは自分のうちにはないものだ」と、そのようなインパクトを人々に与えることができるのです。それがペテロでありパウロであり、それがこのテサロニケのクリスチャンたちだったのです。

これはペテロが記してくれたメッセージ、私たちの心にしっかりと刻んでおくべき銘記すべきメッセージです。なぜなら、イエス・キリストが帰って来るといふこの事実は、私たちひとり一人の生き方に影響を及ぼすからです。この事実はあなたの生き方を変えるからです。それでペテロもパウロも、後で見るヨハネもみな、そのことを私たちに教えようとしているのです。

・クレテ教会（複数）：パウロはクレテという地中海の島ですが、そこにある教会の責任を持っていたテトスに対して同じことを言っています。テトスへの手紙2：11-13「:11 というのは、すべての人を救う神の恵みが現れ、:12 私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、:13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。」と。今、私たちが見ているのと同じことです。それが小アジア、現在のトルコであろうと、それがギリシャの北のテサロニケの町であろうと、地中海のクレテ島であろうとこの日本であろうと、どこであったとしても、救いに与った人々、神が恵みによって救ってくれた人に神がくださったのは、罪の赦し、永遠のいのちだけでなく、この生ける望み、希望なのです。

イエスが帰って来られる、イエスが私を迎えに来てくださる、私をそのすばらしい特別の住まいへと招いてくださる、私はそこでこの主とともに永遠を過ごす、この事実をしっかりと心に留めている人たちは、それにふさわしく生きるということを聖書は私たちに教え続けています。前回、私たちはⅡペテロ3：11で「このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとなれば、」を見ました。今の天と地のすべては滅んでしまうと、ペテロはここで修辞疑問を用いています。つまり、答えはもう分かり切っているのです。ですから、質問はこうです。「すべて崩れ去ってしまうなら、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょうか。」と、この答えは当然「そうです！」です。

ですから、ペテロはこうして、自分はそのように生きていたし、そして、愛する兄弟たちも同じように生きることを望んで、このような修辞疑問をもってこのメッセージを与えるのです。つまり、イエス・キリストの再臨が近いというこの事実を知っている私たちは、それにふさわしく生きるはずで、その生き方は「聖い生き方をする敬虔な人でなければならない」と言います。もう見て来ました。なぜ、このようなことを言ったのか？ペテロは人間とはどういう者かをよく知っていました。行動だけを良くしようとしてもだめです。行動を生み出す心を良くしなければなりません。ですから、敬虔な人でなければならない、心から神を恐れる人、心から神を敬う人でなければならないと言います。そのときに、そこから正しい行いが生まれて来るのです。そのことはすでに見て来ました。

ですから、ペテロはこうしてイエス・キリストが再臨されること、イエス・キリストにお会いするその日が近づいているという、この切迫感、待望感が、神の前を正しく生きる動機の一つだと言うのです。そのことをいつも覚えて生きている人はこの日を正しく生きようとし、なぜなら、主イエス・キ

ストは今日帰ってくるかもしれないからです。今日がこの地上における最後の日かもしれないとするなら、私たちがしっかり覚えるべきことは、今日をどのように生きるのか？です。

覚えておられますか？イエスがこのようなことを話されました。マタイ24：45-47「:45 主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいだれでしょう。」と、主人から役割が与えられたのです。その与えられた役割を忠実に果たすしもべ、続いて「:46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。:47 まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せようになります。」とあります。伝えたいことは「すべての人間には責任がある」ということです。最初に言われた「忠実なしもべ、思慮深いしもべ」はクリスチャンのことです。神が私たちに与えられた責任を忠実に果たします。神は私たちに霊的な賜物をくださったし、時間を健康を、いろいろな財産も与えてくださっています。問題は、それを神の目的に基づいてそれに沿って用いているかどうかです。なぜなら、この忠実なしもべは主人の命令に忠実に従ったからです。主人が「せよ」と言ったことを忠実にしました。そのことが問われているのです。

この責任はクリスチャンにだけあるものではありません。そうでない人たちにも同じ責任が与えられています。なぜなら、その後を見ると分かります。「悪いしもべ」のことが書かれています。このことは後で見ます。ですから、私たちはイエス・キリストが帰って来るその約束をただ聞いただけでなく、それを信じてそれを待つ者として、私たちはこの日が地上における最後の日かもしれないという思いをもって生きるのです。そのようにして人々は生きたのです。今日主人が帰ってくるかもしれない、その主人にお会いする備えができていますかどうかです。このことをしっかり覚えている者たちは、先ほどから見てるように、生き方にその信仰が反映されます。

ヨハネがそのことを言っています。Iヨハネ3：2、3「:2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。」と、私たちはイエスにお会いしたときに私たちはイエスに似た者に変えられます。栄光のからだをいただくのです。ヨハネはこのように記しますが、続けてこう言います。「なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。:3 キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」、つまり、イエスにお会いしたとき、私たちはキリストに似た者に変えられ栄光のからだをいただくと、そのことを覚えそのことに希望をもって生きている人は、今日の生き方にその影響が及ぶ、影響が与えられるということです。「キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と、自分の生き方、自分の歩みに確実に影響が及ぶということです。

そのことを私たちは今見ているのです。なぜ、ペテロが最後の最後にこのイエス・キリストの来臨について話をしたのか？この真実を話したのか？それがただ事実であるだけでなく、これがひとり一人の生き方を変えるからです。先ほどから話しているように、イエスが今日帰って来るなら、私たちが自分に問い掛けることは「私はどのように生きるか？」です。主にお会いする、このクリスチャンに与えられた希望は、確実に私たちの生き方に影響を及ぼします。しかしながら、そのことを知っていながら余り生き方に影響が及んでいない、そういう人たちがいることも事実です。「主イエスが帰って来ることは知っているけどだから何なの？」と。ちょっと極端な例かもしれませんが…。

皆さん、本当にイエスが今日帰って来ると思うなら、皆さんはどうしますか？この残された数時間が私たちの地上における最後の時間だとしたらどうしますか？このように聞いても、ある人たちは自分にとっては無関係だと、もし、本当にそう思っているなら問題があるのです。なぜなら、先ほども見たように、この望みを抱く者の一部の者だけが「キリストが清くあられるように、自分を清くします。」だと言っています。「この望みをいただく者はみな、」と言っています。では、イエスが帰って来るということを聞いてもそれが自分の生き方、生活に影響を及ぼしていないなら、何か問題があるのです。少なくとも、三つのことが考えられます。

◎「終わりの日が近い」ことが正しい生き方の動機とならない原因は？

(1) 生きる目的・責任を忘れてしまっている

何のために自分は生かされているのか？その目的を忘れてしまっているのです。私たちがこうしてこの日を神から与えられて生きているのは、神の栄光を現すためです。Iコリント6：19、20で教えています。「:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。」と、イエス・キリストがご自身のいのちという最も尊い犠牲、代価をもって、あなたを罪から買い取ってくださったのです。パウロは言います。「ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と。これが救いに与った者たちが今与えられているこの日を何のために生きるのかを教えることです。主が与えてくださったこの日を神の栄光のために生きていきなさいと。あなたの快樂を満たすためではありません。あなたのやりたいことをするためでもありません。神の栄光を現すために生きなさいと、

それが救いに与ったあなたが生かされている目的だということです。だから、そのことを忘れてしまっているなら「自分の人生だから好きに生きても構わない」ということになってしまいます。だから、イエスの再臨のことを聞いてもその日が近いということも聞いても生活が変わって来ないなら、もしかすると、「私は何のために生かされているのか」というその目的を忘れてしまっている可能性があります。

(2) 罪に支配されている

その人が罪に支配されている可能性があります。詩篇51篇には、ダビデ王が自分の罪を示されてそれを神の前に悔い改めていることが記されています。姦淫の罪を犯し、殺人の罪を犯したダビデ王がその罪を悔い改めるのです。51:8にこのように書かれています。「私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになった骨が、喜ぶことでしょう。」と。罪によって喜びを失ってしまったダビデ、彼が求めることは、その喜びを今一度彼自身が持つて生きることです。ダビデが喜びを経験していたのは、彼が神とともに歩んでいるとき、神の前を正しく生きているとき、その確信が彼に喜びをもたらしたのです。

皆さん、今まで学んで来たことを思い出してください。私たちが喜びをもって生きるために必要なことは、神を喜ばせることです。神を喜ばせているなら、その喜びが私たちのものにもなるからです。ダビデは神に逆らったのです。その結果、喜びを失ったのです。ですから、彼がここで告白していることは、神の前を正しく歩んでいきたいということです。神の前を正しく歩むことによって、神がくださる喜びに彼自身が今一度満たされること、そのことを望むのです。だから、彼はこう言っています。12節「あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。」と。喜びがどこから来るのかを知っているのです。「いつも喜ばなければいけない」ではありません。いつも神を喜ばせることを私たちが心がけてそのように生きているなら、私たちは結果的に喜び続けているのです。もう皆さんはよくご存じのことです。

ですから、イエスが帰って来られるということも聞いても、与えられたこの日を神の前に正しく生きようと、もし、そのように思っていないなら、その人は罪によって支配されている可能性があります。罪は大変恐ろしいものです。神に従っていきたいという思い、神の栄光を現したいという思い、神のみこころに従っていきたいという思い、つまり、神を喜ばせる選択、そのことをしないようにと働き続けるのです。ですから、少なくとも考えられる理由として、イエスが帰って来られるという事実が私たちの生き方を変えていかないとすると、影響を及ぼさないとすると、生きている目的を忘れてしまっているかもしれないし、罪に支配されているかもしれません。

(3) 救われていない

これは一番恐ろしいことですが、救われていない可能性があるということです。先に見たマタイ24章には「良い忠実なしもべ」と「悪いしもべ」のことが書かれていました。「悪いしもべ」とはどういうしもべであったのか？48-51節「:48ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい』と心の中で思い、:49 その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、:50 そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。」と、ペテロが教えるように、まさに「盗人のように」イエスは帰って来ると、つまり、予期しないときに帰って来るとということです。その時に何が起こるのか？「:51そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。」とあります。「泣いて歯ざしりする」とは「永遠のさばきを受けて永遠の苦しみを味わう」ということの表現です。ですから、地上で悪いことをして何かの罰を受けて、その後、永遠のいのちに…というわけではありません。これは永遠の滅びに至る、地獄に至ることです。

ですから、この箇所が私たちに教えることは、お互いに、クリスチャンであろうとそうでなかろうと、すべての人には神に対する責任があるということです。すべての人には神に従うかどうかの責任があるのです。そして、すべての未信者は「従わない」という選択をしているのです。神を信じようとしない、従おうともしない、愛そうともしない、もう一つ、逆らうという選択をしています。この人たちは「知らない、関係ない」と言って自分の好きなように生きて、その結果、永遠の滅びに至るのです。

最初に見たように、では、クリスチャンはどうか？クリスチャンにも責任があるのです。救われているあなたには「どのように生きるのか」という責任があるのです。主が私たちに命じておられることは「わたしに従いなさい」です。ですから、それは「良い忠実なしもべ」なのです。この24:45で言われていることは、主人から言われたことを忠実に守り続けていくしもべです。そのようでありなさいということです。

正しい心をもって主に従い続けて行くことです。イエスが帰って来られるということをしつかり心に刻んで、この日、与えられた今日の一日を主の前に正しく歩むのです。多くの信仰者はその決心を何回もしたことでしょう。神に喜ばれるように生きていきましょう、神の栄光を現すために生きていきましょうと、しかし、どうでしょう皆さん…、大変難しいと気付いたりしませんか？決心することはできて

も実際にそのように生きていくことは大変難しいことです。そのことは恐らく多くの信仰者が経験していることです。そして、多くの方々が真面目に真剣に神を喜ばせるために生きていきたいと願って、そのように歩み始めるのです。ところが、失敗続きで、そのうちに、持っていた希望が失望に変わってしまいます。そして、周りを見て、自分はもうだめなクリスチャンだと諦めてしまう信仰者の数だけが増えていきます。そんなことはありませんか？

先ほど見て来たことを思い出してください。信仰者はその生き方をもって周りの人たちに渴きをもたらすのです。周りの人たちが私たち信仰者を見て「この人たちが持っているものは自分のうちにはない」と、そのような影響を及ぼしていきます。そして、そのことを聞いて、私たちはそのように生きていきたいと思えます。神の栄光を現す者として生きていきたいと思う。しかし現実には、それが大変難しいことに私たちは何度も気付くのです。そのうちに「私はもうだめだ」となって、ある人はこのように言います。「私を見ないでください。私はできの悪いクリスチャンです。もっとできのいいクリスチャンを見てください、一生懸命真面目に心からトライしたのにこのように歩むことができなかった」と、もし、あなたがそのように思っているなら、もし、少し失望を覚えているなら、ペテロのメッセージをしっかりと聞くことです。ペテロはどうすればいいのかを教えてください。残念ながら、私たちは今日そのことを見ることはできません。

実は、ペテロはそのことをこの手紙の最後に愛する兄弟たちに教えようとするのです。3：14から、ペテロは再び、クリスチャンとしてそれにふさわしく生きること、どのように生きていくのか？救いに与った者としてそれにふさわしく生きていくためにはどうすればいいのか？どのように歩いていくのか？そのことを教えてください。キリスト者として、主イエス・キリストの再臨を信じている者としてそれにふさわしく生きること、そのことを教えてください。

***キリスト者としてそれにふさわしく生きることとは？**

A. 主の約束に対する忠実さ 14 a 節

主の約束を心から信じて従っていくことです。「そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、…」と記されています。見ていただきたいのは「待ち望んでいる」というのは現在形の動詞です。ですから、ペテロは小アジアのクリスチャンたちが「待ち望み続けている」様子、そのことを知っているのです。しかも、ここに「愛する人たち」と書いています。救いに与っている兄弟姉妹たち、ペテロが本当に心から愛する人たち、この人たちが主イエス・キリストの再臨を待ち望み続けながら生きているということを確信しているのです。ということは、まさに、これが私たちが信仰者として歩むべき姿を私たちに教えてくれています。あなたも神に喜ばれる信仰者として生きていこうとするなら、主にお会いするのは今日かもしれないという思いをもって、与えられた一日一日を生きることです。

サタンは巧妙に働きます。「また明日があるよ、明後日もあるから、2018年は確実にやって来る」と。どこにそんな保証がありますか？結局、そうして今日をどう生きても構わない、また明日やり直せばいい、今日たくさん食べすぎた、明日ダイエットすればいい、でも、また明日も食べます。そうして先延ばしするのです。信仰においても同じです。今日どう生きてもいい、また明日チャンスがあるから、明日悔い改めればいいと。明日になればまた同じことをします。聖書が私たちに教えることは、「今日が最後かもしれないという思いをもってこの日をしっかりと生きなさい。この日を無駄にしないように。」ということです。

ある一人の有名な牧師にある人が質問しました。「イエスが明日帰って来るとしたら、あなたはどのように生きますか？」と、ちょっと考えてみなければならない質問です。その人は自分の手帳を開いて「ここに書かれている予定通りに生きていきます」と答えました。この人は主に会う備えができていたのです。私たちなら「それは大変だ！今から行動を正して神が喜ばれることをしなければいけない！」となるかもしれません。一日一日を「今日が最後かもしれない」という思いをもって生きている人は、この日を無駄にしていません。そういう信仰者であるようにと、このみことばは教えているのです。

B. 救いに対する忠実さ 14 b 節

二つ目に大切なことは「救いに対する忠実さ」です。見てください。「しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。」と。「励みなさい。」という動詞は命令形です。どういう意味があるのか？「自らの最善を尽くす」ということです。何のために最善を尽くすのか？「しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、」とあります。このために「最善を尽くせ」ということです。ペテロは「平安をもって御前に出られるように」なるには、ひとり一人が「しみも傷もない者」でなければならないと言うのです。この14節でペテロは何を教えようとしているのか？結論を言うと、「救い」と「信仰者としての忠実さ」という二つのことです。

1. しみも傷もない者

1) しみ : このことばは新約聖書に4回出て来ますが、「汚れ」と訳されていることばです。「道徳的な汚れ」のことです。I ペテロ1:19には「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」とあります。ヤコブ1:27には「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることで。」とあります。ですから、「しみ」とは「道徳的な汚れがない、聖い」ということです。

2) 傷 : この形容詞は「非難すべきところがない、欠点がない」ということです。このことばは新約聖書に1回しか出て来ません。ペテロは、私たち信仰者は「しみも傷もない者」としてあるべき、そのような者として成長することが必要だと言います。なぜなら、II ペテロ2:13をご覧ください。「彼らは不義の報いとして損害を受けるのです。彼らは昼のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています。彼らは、しみや傷のようなもので、あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです。」と書かれています。ここでは偽教師たちのことをこのように言っています。ペテロはこうして、神を信じていないにせ教師たちと信じている兄弟たちを対比しているのです。信じていない者たちはまさに「しみや傷」のある者、道徳的に汚れていると言います。非難するところがたくさんあると。ところが、クリスチャンであるあなたがたはそうではないと言うのです。

* 私たち救われた者は「しみや傷のない者」とされた

救いに与った私たちはこのような道徳的汚れから、非難されてしかるべき私たちが、罪から洗い清められたのです。エペソ1:4には「すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と、ピリピ2:15にも「それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、」とあります。これが「救い」です。聖い神の前には聖くなければ立つことが出来ないから、神はあなたの汚れを清めてくださったのです。だから、「御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と、そのような人へとあなたは生まれ変わったのです。

なぜなら、それがイエス・キリストだったからです。イエスはまさに「しみも傷もない」方でした。先に見たI ペテロ1:19には「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、」とあり、ヘブル9:14にも「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。」と、非難されるところが全くなかったと書かれています。

確かに、人々が私たちを見るときに、私たちには非難されるべきところがたくさんある者です。でも、感謝なことに、神は私たちを赦してくださり清めてくださった。問題は、神がどう言われるか？です。私たちはいろいろなことを言いますが、神の前に立ったときにこの神が私たちに何と言われるか？です。そのことは次に書かれています。見てください。

2. 平安をもって御前に出られるように

このように続いています。「御前に出られる」ということばは非常に大切です。これは「見つかる、わかる」という意味です。「御前に」とあるのは、私たちが神の前に立つときのことで、裁判官である神の前に立ったときに「すべてのものが見つかる、すべてのことがわかる」と言っているのです。なぜなら、神はすべてのことを見ておられ、あなたのすべてを知っておられるからです。ヘブル4:13に「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」とある通りです。ヨブ記26:6にも「よみも神の前では裸であり、滅びの淵もおおわれぬ。」とあります。詩篇33:13-15にも「:13 【主】は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。:14 御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。:15 主は、彼らの心をそれぞれみな造り、彼らのわざのすべてを読み取る方。」と書かれています。

この神の前に立って私たちは神のさばきを受けるのです。そのときに「平安をもって御前に出られるように」とこれがカギです。すべての人間は例外なく神の前に立つからです。ある者は平安をもって立ちますが、ある者は平安をもたず恐れをもって立ちます。恐れをもつのは救いに与っていない者たちです。彼らはこの主のさばきに会うことが大変恐ろしいのです。なぜなら、自分のすべての罪が明らかにされて、自分が地獄にふさわしいものであることが明らかにされて地獄に送られるからです。

しかし、私たち信仰者はそのさばきから完全に救い出されたのです。だから、私たちは平安をもって神の前に立つことができるのです。そうですね、皆さん。ですから、イエスにお会いするということはあなたにとって恐怖ではないはずで、あなたはそれを待っています。なぜなら、罪が赦されたというその確信を私たちはもっているからです。

* 神の前に立つとき

(1) 忠実であること : 神の前に平安をもって出られる

マタイ25章に書かれている十人の娘のこと、五人の娘は油をもっていました。「:1 そこで、天の御国

は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。:2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。:3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。:4 賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。」と、彼女たちは備えができていたのです。クリスチャンのこトです。あなたもイエスにお会いする備えができています。主の前に立つときに、主はあなたを責めてあなたを永遠の滅びに至らせるのではなく、あなたを祝福してくださる、だから、私たちは平安をもって出ることができるのです。

(2) 励む : 神の前に平安をもって出られるように励む

14節には「…励みなさい。」と書かれています。考えなければいけないことは、「救いを得るために一生懸命励みなさい」と聖書が教えているのかどうかです。義認を得るために、罪の赦しを得るために、私たちはどんなに努力をしてもどんなに頑張ってもそれを得ることはありません。これは「信仰によって神から与えられる救い」です。では、何のことでしょう？ピリピ2:12に「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」とあります。これはキリスト者は「救いの達成のために努めるように」との命令です。

* ここで言われている「救い」とは「義認」のことではなく、「聖化」のことです

クリスチャンの歩みのこトです。あなたがこの命令に忠実に従うなら、主の前に立つときに「平安」をもって立つことができるのです。確かに、平安をもって神の前に立つことができるのは罪の赦しをいただいているからです。同時に、私たちは「励みなさい」と言われている以上、益々神の前に立つことを待ち望みながら、与えられた一日一日を神の前に正しく生きることによって、つまり、しみも傷もない者として罪から離れて正しく歩むことによって、私たちはその備えができるということトです。

パウロが言いました。Ⅱテモテ4:7、8「:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」、彼はやるべきことをやった、地上における責任を果たしたと言います。もちろん、失敗もありました。でも、彼は失敗したときは神が教えるように神の前にその罪を告白して主に従い続けました。罪から離れて神が喜ばれることを選択しながら生きていこうとしました。「私は走るべき道のりを走り終えた」と。そのような信仰者であるようにとペテロも教えるのです。あなたはしっかりと主の前を歩み続けているかどうか？主の前を正しく歩み続けているかどうか？そのことを問い掛けるのです。

* 「しみも傷もない者」とされたあなたは、益々「しみと傷のない者」として成長しなさい

皆さん、イエスは帰って来られます。イエスにお会いする日が近づいています。明日のことや来週のこと、来年のことを考えるのではなく、「この日のこと」を考えるのです。この日を神の前に正しく生きることトです。その生き方を積み重ねていくこと、それがまさにパウロが言った「走るべき道のりを走り終え」た生き方なのです。そのようにあなたが生きるなら、主の前に立つときに「よくやった、良い忠実なしもべ」と私たちの主人がそう言ってくださるのです。しっかりと諦めずにそのように歩み続けなさい、与えられたこの一日を主の栄光のために生きていきなさいと、それが主が私たちにくださるメッセージです。そのように歩んで主にお会いする備えを為していきましょう。

《考えましょう》

1. 「主とお会いする」という希望が生き方を変える理由を考えてください。
2. 「主とお会いする」という希望を失わないためには、どうすれば良いとあなたは思われますか？
3. 「主によるさばき」が行われるとき、あなたの何がさばかれるのでしょうか？
4. 「しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られる」ためには、どうすれば良いとあなたは思われますか？